

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



「動く分科会」焼津行動の参加者に説明する飯塚弘弘さん

三・一ビキニ事件記念集会開く

三月一日、第五福竜丸平和協会主催の「三・一ビキニ事件記念集会」が東京文京区本郷の学士会分館で開かれ、市民、平和運動家、科学者約四〇人が出席しました。



3・1ビキニ事件記念集会(3月1日・学士会分館)

二次世界大戦と核兵器の人類史的意味、人類の貴重な宝ともいえるべき日本の核兵器廃絶の運動の歴史

大田知事を支援し政府に抗議を 松井康浩

一国の総理が、沖縄県知事を訴えるという珍事が起きた。総理と知事が、裁判所を舞台にして喧嘩をしているのであって、世界の物笑いである。なぜ話し合いで解決できないのか。日本国民たるもの、訴を起した総理に対して、抗議を集中しなければならぬ。

沖縄は、世界有数のアメリカの核基地である。アメリカ軍は、ここを拠点として、アジア、アラブをはじめ世界各国に睨みをきかせて、その意に従わせている。朝鮮戦争、ベトナム戦争そして湾岸戦争は、何れもここを基地として行われた。日本政府は、これに協力加担して、多数の人民を殺す手伝いをしたわけである。

沖縄の反戦地主は、アメリカ軍に対して、そのような基地に土地を提供することを拒否した。平和を願う国民として当然のことである。しかるに、自民党と連立政権を結んだ社会党委員長である前首

と伝統、科学者の果たした役割など二時間近く語り、感銘と運動への確信を参加者に与えました。集会ではまた、同日焼津で開かれた「3・1ビキニデー集会」で

第五福竜丸乗組員大石又七氏が訴えた発言内容が文書で紹介され、「ビキニ水爆」「死の灰」の被爆者とともに「の決意を新たにさせました。

相は、党是を弊履の如く捨て去って、憲法違反の日米安保条約を有効かつ有益とし、この条約によって基地を提供する義務があるとして大田知事に代理署名を命じたのである。

大田知事は、地主の人権、沖縄県民の苦しみ、そして日本とアジアの平和を熟慮して、かねてから基地の縮小・廃止を政府に要請していたから、首相のこの命令を拒否した。当然のことである。怒った首相は知事を被告とする裁判を提起したわけである。

知事が反対する地主に代って地主の土地をアメリカ軍基地に提供するためには、十分な理由がなければならぬ。政府はこれを「公共の利益」といつている。大田知事は基地を撤去することこそ公共の利益というのである。読者は、何れに軍配をあげられるか。

橋本総理も日本はアメリカに守ってもらっているというから、日本

国民の安全のために地主は我慢しなければならぬことになる。しかし、ソ連崩壊後の日本は、果たして何れの国から侵略の脅威を受けているといえるか。中国か、南北朝鮮か、ベトナムか。それらの国は、国内の政治、経済に精一杯であって、日本侵略の意図をもっていないことは何人にも明白であろう。むしろ、自衛隊の増強、アメリカ軍基地に脅威を感じているのである。

沖縄県民は、沖縄戦争、アメリカによる占領、復帰後の長期にわたる基地によって、筆舌に尽くし難い苦難を受けている。米軍人による性犯罪をはじめとする多数の犯行、演習による耳をつんざく騒音による授業妨害、砲弾による自然破壊、そして広大な基地による経済発展の阻害など数えきれない。

諸悪の根源は、米軍の核基地にある。平和を守り、人権と生活を守るために、大田知事を支援し、政府に抗議を集中すべきだろう。(平和協会理事)

ビキニ被災四〇周年につづいた広島・長崎被爆五〇年が明けました。わたしたちは、フランス・中国の核実験強行にたいする諸国民の抗議と怒りの運動が、急速に核兵器全面禁止・廃絶へと大きく前進するなかで、内外の原水爆被爆者とともに、きょうここ焼津につどいました。核兵器全面禁止・廃絶の先頭に立つべき被爆国日本の政府は、国連での核兵器廃絶決議、核兵器使用禁止決議に棄権するなど、国民の声を背をむける誤りを改めようとしません。アメリカの世界戦略の支柱である日米安保条約、日米核軍事同盟を憲法に優先させる政治は、沖縄の少女の安全を米海兵隊の暴行から守ることができない無責任政治にはなりません。大きく変化する世論を確信にして、さらに運動を強め、ひろげようではありませんか。△略▽

「ベトナムにヒロシマ・ナガサキをくりかえすな」とベトナム戦争当時から沖縄米第三海兵隊による「原子砲」の沼津・今沢海岸からの搬出・入江東富士での砲撃訓練に懸命に反対してきたわたしたちは、実弾砲撃演習の沖縄からの移設に反対し、「民族の象徴富士山が異国の軍隊に撃たれつつけることを許すな! 東富士沼津今沢の米軍基地をすぐ返せ!」と全力を尽くしてすすめてきた運動をさらにひろげます。

「アピール」署名、核実験禁止署名をはじめとしたとりくみで、核実験全面禁止条約、核兵器全面禁止・廃絶条約の実現を求め大きな世論と運動をきつきました。被爆体験を受け継ぎひろめ、「松谷訴訟」を勝利させ、被爆者にたいする国家補償を実現させましょう! 広島・長崎の被爆者とともに歩んできたからこそ運動・世論を今日まで前進させることができた教訓を発展させ、ビキニ・マーシャル・タヒチ・ネバダ・セミパラチンスクなど世界の核実験・核演習・核兵器開発の被害者と手をむすび、被ばくの実相と加害責任を明らかにし、被害を補償させましょう!

米軍基地なくせ、核軍事同盟なくせと、沖縄県民と連帯した運動をさらに発展させましょう! これらの前進を基礎に、原水爆禁止世界大会を成功させましょう! 久保山愛吉・すず夫妻の遺志、そしてビキニ水爆「死の灰」の犠牲者みんなの無念の思いを胸にきざみ、ヒバクシャとその遺族が生きているうちに、一発残さず核兵器をなくしましょう!

(三月一日、焼津で開かれた「草の根からの世論の力で、核実験禁止の運動のひろがり」を核兵器廃絶! 被爆者に国家補償を! 被災四〇周年一九九六年3・1ビキニデー集会」で訴えられた「焼津アピール」より)

核兵器と科学者

連載 15

東西の科学者の会議を日ざして

——ラッセル・アインシュタイン宣言の背景と意義(1)——

小川 岩 雄

核時代に生きる科学者には、世界の平和や人類の運命について、特別の社会的責任がある。第二次大戦の直後から、各国、とくに欧米の多くの科学者は、日本への核使用や戦後の核軍備競争の開幕を阻止できなかった反省から、こうした自覚に急速に目覚め、自国内で同志の組織化を熱心に進めた。しかし、彼らの警告にも関わらず水爆は実用化され、軍備競争はいよいよ激化する。その中でこれを憂慮する科学者の国際協力が緊急の課題として待望されるようになった。例えば一九五四年の初頭には、ビキニ事件の発生に先立ちインドのネール首相が、核戦争の災害を解明する科学者の国際委員会を作るよう提案している。

(ASA)の評議員が話し合い、ASA内に「科学と社会に関する国際会議」の準備会が作られた。また政府側でも、わが国などの提案で国内に「原子放射線の影響に関する科学委員会」(UNSCLEAR)が作られ、核実験による放射能汚染の現状と影響についての国際的な調査が開始された。一方、ソ連の影響力の強い世界科学者連盟(WFSW)も水爆の脅威を早くから警告し、会長のジョリオ・キュリー博士は一九五〇年三月にストックホルムで開かれた「平和擁護世界会議」の常任委員会総会で、議長として核兵器の絶対禁止と厳重な国際管理を求める国際的な署名運動を提案した。この提案(ストックホルム・アピール)は異議なく採択され、翌年までに全世界で約六億の署名を集めたが、文面後半の「最初に核兵器を使う政府は戦犯」との主張は核戦争の破局性の認識を欠き、報復

核攻撃を正当化している点で、核廃絶の理念とは相容れない。またこれはあくまでも市民運動であり、科学者独自の国際協力や会議について、西欧のより広い思想信条の科学者とソ連の科学者との対話がようやく実現したのは、一九五五年八月、ラッセル・アインシュタイン宣言の発表後一カ月近く経ってからであったという。そのような科学者の国際会議の開催を、はじめて提唱したのが英国の高名な哲学者バートランド・ラッセル卿である。彼は名門の出で数理哲学などで業績を挙げ、一九五〇年にノーベル文学賞を受けているが、熱烈な平和運動家としても知られ、第一次世界大戦では非戦論を唱えてケンブリッジ大学の職を追われた。その彼は広島への原爆投下から僅か数ヶ月後の講演で、近く出現が予想される水爆の人類に対する脅威を予言したばかりか、東西の科学者の会議が人類を災害から救う上で重要な役割を果たすであろうことを示唆している。

は、いよいよ行動に移る時がきたと考え、先ず十二月二十三日、ラジオ放送を通じて「人類の危機」と題する講演を行い、核兵器が使われる今後の戦争の破局的結果について鋭く警告した。この放送は世論に強い衝撃を与え、その手土産にはげまされたラッセル卿は、その講演内容を骨子とし、科学者の国際会議を呼びかける宣言を起草し、世界各国の著名な科学者に署名を求めたこととした。そのさい内容が一方の陣営の主張に偏らないよう、また署名者の顔触れもバランスを欠かないよう細心の注意が払われた。こうしてまずアインシュタイン博士に署名の要請が行われた。博士は精読後署名を快諾したが、その二日後に亡くなっている。この宣言が後に「ラッセル・アインシュタイン宣言」と呼ばれることになったのは、この歴史的経過に由来する。続いて湯川、ボルン、ジョリオ・キュリー、ムラー、ポーリング各博士ら、六カ国から物理学者を中心に九人(うち七人はノーベル賞受賞者)が署名、一九五五年七月九日にロンドンで発表された。(立教大学名誉教授、平和協会理事)

第五福竜丸・保存の意義

猿 橋 勝 子

第五福竜丸被災事件から、今年の三月で満四二年が経過した。かなり昔のことであり、事件後に生まれた方も多くなっている。若い方々にも問題の理解を深め、また私の思っていることを少し述べ、ご一緒に考えてみたいと思う。この事件は私にとっては、大変衝撃的な第二回目のものであった。第一回目は言うまでもなく、広島・長崎へ原爆が投下され、数十万人の市民が殺された時であった。私は研究室の疎開先の長野県諏訪で、この報道を聞き、研究者を志していた私の心は、大きく揺れ動いた。翌年東京に帰り、私は研究者になるための基礎的指導を、三宅泰雄先生から受けていた。それから八年の後、またもや今度は水爆による日本人の犠牲者が出た。原爆の千倍以上の威力をもつ殺人兵器である水爆をアメリカが開発し、その爆発実験を北太平洋の赤道に近いビキニ海域で強行し、日本の小さい漁船第五福竜丸船上に、多量の灰を降らせ、乗組員全員二十三人が急性放射能症となり、その中の一人・無線局長の久保山

愛吉さんが半年後に亡くなるという事件に発展した。憤懣やるかたない思いをもった。この事件が報道されるや、日本の科学者たちは、一斉に、全く自主的に、真相解明に立ち上がった。研究費も乏しく、未だ戦後というような状態で、細々と研究の建て直しをしていた時であった。科学者たちは自主的な企画立案の下に、二ヶ月後にはビキニ周辺海域の実態調査に、水産庁所属の調査船「俊鶴(こころ丸)」を派遣する等、海洋の大規模な放射能汚染の解明に取り組む、その実態を世界に先駆けて、日本の科学者によって初めて明らかにしたのである。日本の科学者の、科学者の勤めを果たそうとする毅然たる日々の行動を、私は大変頼もしく思った。こうして広島・長崎の核兵器による被爆から約九年後に、初めて核兵器の恐ろしさ、死の灰の怖さを、世界の人々に知らしめた事件であった。科学者が関わる問題、事件はその後、科学技術の発展とともにいくつもあつた。特に環境汚染・自然破壊にかかわる重要問題が次々

と起つた。福竜丸の被災事件の時のように、科学者の良心が前面に出た真相解明の姿を、その後、あまり見掛けないように思う。これはどうしたことであろうか。科学技術は人間社会にとって、何らかの利益をもたらすように、開発が進められている筈である。しかし人間社会の仕組みは単純ではなく、しかも人々は大変利己的である。人類全体の共存・共栄・福祉を考える前に、それぞれが属する狭い社会の利益、自分の利害関係を追い求めることが、優先しがちである。自分たちさえ良ければ良いと、自己中心的に、自己保全、身の安全を先に、社会的な出世を考え、時には功名心のための改革を唱え、科学技術開発に便乗してきたとも見られる。その極端な例は軍事産業に見ることができよう。国を守るという大義名分が通れば、人殺しを目的とする核兵器の開発・製造さえ、強力に進めてきたのである。核兵器の開発も科学技術者の協力なくしては、遂行はできないの言うまでもない。科学技術者の心、その家族をふくめた人々の心の中では、どんなことを考えているのだろうか。このようなことは、何も科学技術の世界に限ったことではない。

政治・経済等々の社会でも、毎日の新聞で報いられている通りで、人間の心の醜悪さをみせつけられている思いである。「科学技術の進歩」は確かに私達に一部豊かな生活を与えたが、同時に、自然環境の破壊はいまでもなく、人々の心をも破壊した。「科学技術の発展」が直ちに「文明の進歩」であった良き時代は、もはや過ぎ去った。その反対に「人類は科学や技術の進歩のおかげで、むしろ死の淵に立たされているのではないか」。科学や技術の発展が、さらに大きな社会的破壊を引き起こす心配はないか。常に人間は進歩と退廃の二律背反の立場に置かれ、いかに対処すべきかという課題を抱え、地球上に生きているのではなからうか。「第五福竜丸事件」、「広島・長崎の被爆」を思うに付け、「科学技術の余りにも急速な発展」が人間にとって進歩なのか、またそれが人々の真の幸福になるものかと、私はただ心配するばかりである。三宅泰雄先生の言われていたお言葉が、常に私の胸を痛くする。「第五福竜丸は過去の歴史というより、むしろ未来の人類の命運を啓示している」(平和協会理事)